

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第926号 平成27年5月8日

## 宮大工の育て方

学校での教育は、基本的に専門職である教師が担わなければなりません、子ども（人）を育てるといふ切り口で見れば、教育は教師の専売特許ではありません。

保護者はもとより、地域の人々や民間企業等で活躍している人々、大工の棟梁やすし職人といった一芸に秀でた人々等々、子どもを取り巻く大人達は皆教育の担い手といっても過言ではありません。

遙か以前に学校を卒業した私にとっても、社会の中で活躍されている多くの方々は我が教師であり、私は今もなお他者から学ぶ日々を重ねています。

その一方で、私は仲間と共に、教師になろうと頑張っている若者を支援し、指導しています。この活動は、全くのボランティアとして行っており、4年目に入っていますが、私たちがこの活動を続けているのは、若者を育てたいという気持ちと同時に、講座に参加している若者達からも学ぶ事が多いと感じているからに他なりません。

先日、日本経済新聞（2月28日付）に「宮大工の育て方」という小川三夫さんへのインタビュー記事が掲載されました。

この記事を読みながら、私は、小川さんという人は優れた宮大工であるのと同時に、優れた教育者であると感じました。

小川三夫さんという人は、1947年（昭和22年）生まれで、現在67歳です。彼は、高校生時に、修学旅行先で法隆寺の五重塔を見て感動し大工を志したのだそうです。その後法隆寺の宮大工、西岡常一棟梁の内弟子となり法輪寺の三重塔等多くの寺社仏閣の再建を手掛けて来ました。

小川さんは、1977年（昭和52年）にいかるが鵜工舎を設立、昔ながらの徒弟制度を踏襲しながら100人以上の弟子を育てて来ました。小川さんが、宮大工の棟梁としてその技、心を如何に若い弟子たちに繋いで来たかという事は、彼の著書「棟梁」の中で詳しく描かれています。

さて、日本経済新聞では、「放り出して待つ、気づくまで」と題して、小川さんがインタビューに答えています。その中から、人の育て方に関する小川語録の幾つかを紹介します。

語録その1「弟子には簡単に教えたらだめ」

小川さんは100人以上の弟子を育てて来たといわれていますが、彼自身は、「育てた」のではなく、弟子が自力で育つ環境を用意しただけだと述べています。

私等は、ともすれば知識や技術を「教える」事に一生懸命になりがちですが、もっと重要な事は、子ども達が自ら学び、成長して行けるような環境を提供する事、というのは重要な指摘だと思います。

小川さんは、「懇切丁寧な指導では、自分で考えられないひ弱な人間ができてしまう。教えずに放り出し、本人がはい上がっていくようにしなくてはだめだ」といいます。

忙しい現代社会の中であって、子ども達がはい上がって来るのをひたすら待つというのは、現実には難しいように思いますが、何でもかんでも手取り足取り、痒いところに手の届くような指導では、人は育たないというのは全くその通りだと思います。抱きしめたり、突き放したり、その緩急が大事なのだと思います。

語録その2「木も人も、ふぞろいでないと強くならない」

小川さんは、建物の材料となる木はどれとって同じものはないが、そんなふうにならざるの方が良いのだそうです。逆に、「同じものが集まったら、ろくなことがない」といいます。

小川さんは、同じものがない、ふぞろいの木一本一本が強みを生かして支え合う、だからこそ建物は強いのであり、その事を自分達は「木が総持ちで塔を支えている」と述べています。

「木が総持ちで塔を支えている」素晴らしい言葉ですね。これは人間社会にも通じるのではないのでしょうか。いろいろな人を適材適所で使ってこそ、その組織は大きな力を発揮する事が出来るという事だと思います。

語録その3「自分が使っている一番いいカンナを貸す」

小川さんは、弟子に対して徹底して刃物を研がせるそうです。それは、「良く切れる刃物を持てば、刃物に恥じる仕事をしなくなる」からで、根性から何から、刃物を研ぐ事で学ぶ事が出来ると述べています。

小川さんは、「先輩たちと一緒に研いでいると、隣から見て『すばらしい刃がついているな』とわかるんですよ。それでも先輩の方はまだだと思っているから研ぎ続ける。十分でないと思ううちは懸命にやる。その気持ちが大切なんですね。その先輩のすごさを目の当たりにするから、懸命に研がなくてはと顔つきが変わってくる」と述べていますが、教育というものの一番根っこの大事な事を教えられたように感じます。

「先輩がきれいにカンナをかけているのを見ていると、自分も1日でも早くああいうふうにかかけたい、かけたいと思ってくる。十分に思わせておいて『削って みい』って削らせるんですよ。すると、うれしくて柱が板になっちゃうくらいに削ります。

その時大切なのは、自分の持っている一番いいカンナを貸すこと。最高の切れ味を知ったら、人間が一気に変わります」というのは、教育をする側に対する鋭い指摘だと思います。出し惜しみせず、自分の持っている最高のものを提供する事、これも教える者にとって大切な姿勢だと思います。

小川さんは、彼の著「棟梁」の中で「身体がきついと、楽を考える。楽を考え出したら、終わりや。楽なんてない事に気がつくまで、ずっと遠回りせなならん。若しくは、楽を求めてやめてしまう事になる。」と述べていますが、これは大工の世界だけではなく全てに通じる事だと思います。小川さんが師匠と仰ぐ西岡師匠から聞かされていたという「不器用の一心に勝る名人なし」という言葉が、印象に残ります。

(塾頭：吉田 洋一)